第9回「ことばをクイアする」

あべ やすし
http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tagengo2019b/

※あえて解説的な説明をはぶいている場合がある。説明していること、説明していないことについて、各自で自分なりにほりさげること。うのみにしないこと、むしろ疑問をさしこむこと、わからない状態から自分なりに出発することが、なによりも大事だからです。

言語学用語としてのジェンダー

糸魚川美樹（いといがわ・みき）はカスティーリャ語（いわゆるスペイン語）の文法上の性について、つぎのように説明している。

> カスティーリャ語は他のロマンス諸語と同様、文法上の性をもち、すべての名詞が男性・女性に分類される。この文法上の性の存在意義は名詞と冠詞・形容詞、それを受ける代名詞との呼応にあるとされる。最近ではさまざまな分野で聞く機会が増えたジェンダーという英語からの借用語は、もとはこの文法上の性を指す言語学用語である。『女性学辞典』には次のようにある。「もともとジェンダーは言語学の用語で、名詞を性別化して分類する文法的性差を表すものとして使われている（竹村和子）」（井上他編『岩波 女性学辞典』、163）（いといがわ 2005:85）。

カスティーリャ語においては、たとえば旧来の文化では男性の仕事と見なされてきた職業が男性形で表現されていた。弁護士（abogado）、教師（profesor）のようにである。そこに、男性中心的な表現をあらためる意味で、それが女性であることをさす「abogada」「profesora」という女性形の表現が追加された（同上:90）。しかし、女性形の表現をふやしていけばそれでいいというものでもないだろう。性別二元論を再生産しているという意味で、「よりジェンダー化された」ともいえる（同上）。糸魚川によれば、フェミニズムの議論をうけて、1980年代後半に非性差別言語使用の奨励・提案が政府機関や地方行政レベルで実施された（同上:91）。男性形と女性形を並列させるとか、集合名詞を使用するとか、@を使用する（oとaが合体した文字とみなす）、性に共通の表現を使用するということなどが奨励された。@に関しては「かきことばでのみ使用可能」（同上:94）であるが、パソコンが一般に普及して以降のうごきとして興味ぶかい。@については、ポルトガル語でも使用例が簡単に見つかる。たとえば「ありがとう」を意味するポルトガル語の「obrigado（男性形）／obrigada（女性形）」を「obrigad@」と表記するわけである。

ことばのジェンダーについては、今後も各言語で議論がすすめられていくだろう。日本語でも、有徴化された表現としての女医、女弁護士、女性総理などといった表現が必要以上に多用されている（無徴としての男性）。たとえば女性が医者をすることを特殊なことのようにあつかうまなざしがなくなっていけば、女医などという表現は使用されなくなるだろう。そのためにも、「女医」というような表現にひそむジェンダー観を可視化し問題化していく必要がある。

不可視化に抗することば

英語の「gay」という表現は、男性同性愛者をさすだけでなく、性別をとわず「同性愛者」をさすことばとしても使用されている。女性に見える人が「I am gay」といっていても、その人の性自認が男性であると即断してはいけない。ゲイということばに女性同性愛者が包摂され、マスメディアで男性同性愛者にばかりスポットライトがあてられていると、女性同性愛者の不可視化という問題が生じる。

日本語でも、近年マスメディアでスポットライトがあてられている性的少数者が男性同性愛者かMTFトランスジェンダー（トランス女性）が中心になっているがゆえに、おおざっぱな呼称として「オネエ」が多用される傾向があった。オネエという語は、ゆらぎを生きる人にとっては、意味が限定的でないという意味で使用しやすいということもあるだろう。一方、自分をゲイと規定している人、はっきりとトランスジェンダーと自認している人にとって、おおざっぱな「オネエ」という呼称に不満をもつこともあるだろう。ひとついえることは、「オネエ」という語には女性同性愛者やFTMトランスジェンダー（トランス男性）はふくまれないということだ。ここにも、不可視化がある。

LGBTという呼称には、そのような不可視化の状況を改善する意味があったといえる。4つのカテゴリーをならべることで、不可視化されがちな女性同性愛者（レズビアン）やバイセクシュアルが可視化される。
しかし、LGBTという語ですべての性的少数者を総称できるわけではない。LGBTという語が多用されるなかで、アセクシュアルなどの人がいないことにされてしまう。そこで、LGBTにさらに頭文字をふやすということがされる場合もある。そうではなくて、LGBTという語を使用しない、拒否するという場合もある。

LGBTという語が流行語のように定着していくなかで、オネエという呼称のように、おおざっぱな呼称として「LGBT」が使用されている例もある。たとえば、マスメディアによる「LGBT当事者」という表現である。たとえば、バイセクシュアルのAさんについて記事を書くなかで、そのAさんを「LGBT当事者」と表記するようなことがある。ここではもはや、「LGBT」というのは「よくわからないけど、そういう人」というあつかいでしかない。一人の人が「LGBT」の当事者であることは困難である。LGBTのうちのふたつを生きているということはある。そして、「性別」というカテゴリーを超越しようとしているトランスジェンダーで、なおかつバイセクシュアルの人が、撹乱的にわたしはレズビアンでありつつゲイでもあるのだと言明することはありえるかもしれない。しかし、自称としてたとえばレズビアンであるとかバイセクシュアルと言明しているひとのことを、「LGBT当事者」ということは、表現として不正確である。ここに、総称としてLGBTという語を使用することの問題がある。総称としては、やはり性的少数者であるとかセクシュアルマイノリティという語が適切ではないだろうか。もちろん、理解のされかたこそが問題であり、中身が見えない総称が使用されることによって、LGBTという語の理解よりも後退してしまう可能性はある。いちばんの問題は人間（多数派）であって、表現の是非だけの問題ではない。けれども、どのような表現を選択するのかは、やはり重要なポイントである。

社会の性規範こそを可視化する

LGBTという語がはらむもうひとつの問題は、性的指向にせよ性自認にせよ、ゆらぎのあるもので、複合的なものであるということが見えにくくなることである。性的指向や性自認に関するさまざまなカテゴリーは便利で、求心力がある。しっくりくることがある。社会の支配的な性規範になじめず、アイデンティティに悩みをかかえている人にとって、しっくりくるカテゴリーとの出会いは、救いになる。しかし、しっくりきたと思えたカテゴリーに、なんだかしっくりこないものを感じるようになることもある。人間は自由だからだ。そこで、自分のありようをはっきりさせないこと、定義をあいまいにし、「遊び」をのこしておこうとする人もいる。英語でよく使用されるLGBTQというときのQとは、クイアかクエスチョニングをさす。クイアとは、既存のカテゴリーを撹乱しようとするような立場、態度をさす。クエスチョニングとは、自分の性的指向や性自認がはっきりしていないということである。このクイアやクエスチョニングという概念が日本のマスメディアには不足しているといえるだろう。

カテゴリーや区分によって概念を整理することは必要であるかもしれない。しかし、カテゴリーで分類していくことにも注意すべき問題があるように思われる。風間孝（かざま・たかし）らはつぎのように説明している。

> セックス／ジェンダー／性的指向／性自認という区分がつくり出されることにより、一方では…中略…ジェンダーやセクシュアリティの説明は「容易」になったように思われる。しかし、他方で、このような考え方をもとに分類が進み、住み分けができてしまうことによって、複雑なジェンダーやセクシュアリティのあり方をつかみきれなくなるというリスクが生じるように思われる。カテゴリーとは現実の記述であると同時に、新たな現実をつくり出す基盤ともなるのだ（かざま／かわぐち2010:173）。

『隠されたジェンダー』において、ケイト・ボーンスタインはカテゴリーということについて、とても示唆的なことをのべている。

> 定義というものは、旅を容易にするための道路標識と同じような役割をもっている。方向を示す、という点において。しかし、ただ標識の下に立ち、何をしたらよいか告げられるのを待つだけでは目的地に着くことはできない（ボーンスタイン2007:26）。

これはつまり、性的指向や性自認に関するさまざまなカテゴリーが先にあるのではなく、まず自分自身が存在し、自分が生きやすくなるために活用する指標として、カテゴリーがあるのだということである。しっくりこなければ、自分で

つくってもいいし、固定的なアイデンティティや名前を拒否してもいいのだ。人間は自由だからだ。ボーンスタインは、自分自身についてつぎのようにのべている。

> ただ、私の場合は明らかではなかった。私は自分のことを、男だとも女だとも思っていない。私の愛する人は性別を変えつつあるのだけれども、そのことにより、私はゲイでもストレートでもないことがわかった。こういう境界線の生活をすることによってわかったのは、私のアイデンティティがますます流動的になっていくことだ。男だとか女だとか、ゲイだとかストレートだとか、そんなグループに属したいという欲求は、少なくなっていくのだ。私のファッションはより固定観念から離れ、遊び心に満ちていく。私自身の自己表現のスタイルと同様に（同上:9）。
>
> 男ではないことはわかっている。この点については、はっきりしている。そして、結論として辿り着いたのは、私は女でもないということだ。少なくとも、大多数の人が従っている、この手のことについての決まりごとには従っていない。困るのは、私たちがいる世の中が、あれか、そうでなければこれか、ということにこだわっているということだ。おせっかいにも、あれか、これかに分けてしまう世の中に（同上:13）。

ここで重要なのは、ボーンスタインにとっては、流動的な自分のありように立ちはだかるものとして、支配的な性規範がはっきりと社会に存在しているということだ。

セクシュアルマイノリティという用語の注釈として、わたしは『ことばのバリアフリー』でつぎのようにのべた。

> …異性愛中心主義や性別二元論（性別主義）など、支配的な性規範によって他者化された人たちのことをさす（あべ2015:33）。

この説明は、他者化される存在（客体）として性的少数者を位置づけている。「ふつう」という概念に他者化されつつも、「ふつう」なるものに反撃する存在としてのありようを見おとしている。「あんたは、なんなのよ」という問いかえし、「ふつうって、なにそれ、おいしいの？」というような「ゆさぶり」をかける存在として、とらえなおすことも必要だろう。

クイアするということ―支配的価値規範をずらし、ゆさぶり、といかえす

そこで重要なキーワードとして、「クイアする」という語をあげることができる。まず、クイアという語について確認してみよう。たとえば飯野由里子（いいの・ゆりこ）はつぎのように説明している。

> …歴史を繙くと、「クィア」とは、もともと同性愛の男性たちに向けられた侮蔑語として、主にアメリカ合衆国において用いられてきた用語であった。ところが、1990年代になると、主にレズビアンやゲイと呼ばれる人たちの中から、この侮蔑語をあえて引き受けることで自己主張しようという集団や運動が登場してくる。かれらの登場によって、「クィア」という用語が持っていた「人を恥じ入らせる呼びかけ」としての機能は無効化されていくことになる。それと同時に、「クィア」は、従来の「レズビアン&ゲイ」の政治と一線を画する新しい政治において、すなわち「異性愛」に逆らおうとする政治ではなく、むしろ望ましいセクシュアリティのあり方にまつわる規範（norm）に逆らおうとする政治において有効な用語として再機能化されていったのである（いいの2007:79）。

金井淑子（かない・よしこ）はクィアという思想をつぎのように説明している。

> もとよりクィア思想においては「攪乱性」という要素が重要視される。クィアという言葉が低ドイツ語の「曲がった」に語源的由来をもち、非異性愛者に対する「変態」や「オカマ」といった侮蔑語を非異性愛者当事者が自称詞として奪還したこの言葉の歴史的経緯を見ても、攪乱的要素があることがわかる。歴史的には80年代のバックラッシュや保守回帰に対抗して、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー等々の連帯を目指し、またそれぞれの固定的なアイデンティティ・ポリティクスを批判的に継承した思想であるからだ。つまりクィアは非異性愛の可視化の中で、現実の覇権的セクシュアリティ体制の異性愛中心主義を批判的に問題化したところにこそ思想的な眼目がある。非異性愛内部の多様な諸主体の差異にセンシティヴでありながら連帯を模索する、そして社会を敵／味方で二項対立的に分断するのではなく、どちらにも貫かれている頑強な性別二元制という制度に対して攪乱的に批判を向けていくという特徴をもっている（かない2007:51-52）。

以上の説明をふまえるなら、「クイアする」ことを、異性愛中心主義や性別二元論（性別主義）など、支配的な性規範にゆさぶりをかけるだけでなく、自分の存立基盤さえも固定することなく攪乱していこうとする試み（主義主張）と定義することもできるかもしれない。

資本主義社会におけるマスメディアとクイア表象

時代の潮流として、性的少数者をあからさまに差別するような言動は、マスメディアではだんだんとすくなくなっていくだろう。むしろ、積極的にスポットライトをあて、マイクをむけるかもしれない。しかし、だれに？ どんなひとに？

資本主義社会において、マスメディアは「絵になる」当事者をおいもとめ、メディア側が理想とする当事者像を勝手につくりあげ、それに合致するかどうかで、人がふりわけられるようになるかもしれない。ふりわけられた結果を、視聴者はたのしみ、そのような当事者像を「ありのまま」のすがたとして「理解」しようとするかもしれない。しかし、みずからメディアをもち発信している人は、ほんとうにたくさんいる。しかし、有名になる人、有名にならない人がいる。

そこには、言語の問題もあるだろう。この世界では、言語は序列化されている。論理的に、よどみなくはなすことが価値づけられている。性的少数者の発信として、英語圏のものばかりが手にとられ、参照され、議論されていくような事態はさけなければならない。障害者など、身体的なマイノリティによる発信にも注目する必要がある。健常ということに疑問をなげかけ、優生思想を批判しつづけてきた障害者運動に、クイアを見いだすこともできるはずである。クイアな障害者による発信もある。マスメディアに依存することなく、あちこちでとびだしていている発信に注目していくことがもとめられる。

そして、言語規範と性規範の問題や、男性を無徴とし、女性を例外あつかいする言語文化の問題、ふつうには名前がない、多数派は名前を知らないというカテゴリーの非対称性の問題など、ことばにかかわる問題＝言語問題をクイアする実践がもとめられる。ことばをクイアすることで多数派の価値体制をゆさぶり、ことばをうばいかえすこと、序列化や客体化に抗して、多数派にとって都合のいい秩序をかきみだしていくことができる。それをクイア社会言語学とよぶことができる。

参考文献

あべ・やすし 2015 『ことばのバリアフリー―情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院
飯野由里子（いいの・ゆりこ） 2007 「「クィアする」とはどういうことなのか？」『女性学』15号、78-83
糸魚川美樹（いといがわ・みき） 2005 「ジェンダー化された言語のゆくえ」『社会言語学』5号、85-103
糸魚川美樹 2014 「スペイン語における「女性の可視性」をめぐる議論」『社会言語学』14号、141-154
小澤かおる（おざわ・かおる） 2016 「性的少数者の情報保障とコミュニティ・アーカイブズ」『社会言語学』16号、119-138
風間孝（かざま・たかし）／河口和也（かわぐち・かずや） 2010 『同性愛と異性愛』岩波新書
金井淑子（かない・よしこ） 2007 「バックラッシュをクィアする―フェミニズムの内なるフォビアへ」『女性学』15号、50-58
菊地夏野（きくち・なつの）ほか編 2019 『クィア・スタディーズをひらく1 アイデンティティ、コミュニティ、スペース』晃洋書房
ボーンスタイン、ケイト（筒井真樹子訳） 2007 『隠されたジェンダー』新水社
森山至貴（もりやま・のりたか） 2017 『LGBTを読みとく―クィア・スタディーズ入門』ちくま新書

雑誌特集／関連雑誌

『女性学』15号（2007年）「特集 バックラッシュをクィアする―性別二分法批判の視点から」
『現代思想』1997年5月臨時増刊号「総特集 レズビアン／ゲイ・スタディーズ」
『現代思想』2015年10月号「特集 LGBT―日本と世界のリアル」
『ことばと社会』16号（2014年）「特集 セクシュアリティ、権力、攪乱」
『日本語学』37巻4号「特集 性と日本語」
『解放社会学研究』
『論叢クィア』1号～7号（2008年～2014年）

学生のコメント

社会通念、通俗的な価値観と「ことば」が深いつながりがあるということを授業を通じて感じましたが、今回何度もつかわれていた“女”という言葉の定義さえ、現代あるいは今後の社会においてはますます曖昧なものになるのではないか、と私は考えています。確かに、“女性”とカテゴライズをすることで、社会問題についての議論を進めることはできるかもしれません。しかし、何を“女”とするかは個々によって違うものです。加えて、セクシュアルマイノリティーばかりではなく「マジョリティー」の人々も「女」という固定枠に苦しめられていると、感じています。「女」というジェンダーを用いた論じ方ではなく、例えば「給与において差別されている人々」「家庭において家事に専業している人々」といった言い方では駄目なのか、と思います。

【あべのコメント：すごく大事な指摘です。フィクションとして存在するカテゴリーに、おさめられたり、おさめられなかったりする個々の人間がいて、カテゴリーは虚構であると同時に、社会の現実でもあります。人種概念、部落差別における部落という概念、障害者、健常者…なんでもそうですが、その内実や線引きの問題、ゆらぎを見ていくと同時に、社会がそのカテゴリーを制度化している現状も見ていく必要がある。そのうえで問うべきなのは、カテゴリーがうみだす問題を解消していくために、どういうアプローチをとるのがいいのかということです。今回のプリントでも言及していますが、どういうふうにとりくむのがいいのか、わたしも結論といえるものはないので、考えていきたいと思います。】

———

夫さんという呼び方を恥ずかしながら初めて知りました。確かに聴き慣れないし、慣れでいうなら旦那さんという呼び方がしっくりくる…けれど、使わないと慣れないし、私もどんどこ使ってゆきたいと思いました。パートナーという表記も本当に良い言葉だと思います。性的マイノリティの人たちの恋人にも使えるのはもちろん、用いてもマジョリティの人と違いがあまり感じられない、悪い意味での特別感が出にくい気がします。言葉の世界にももっと“バリアフリー”な語彙を浸透させたいと思いました。妻を指す言葉として「家内」とか「嫁」とか「細君」とかが存在しますが、「家内」は女性が家にいることが当たり前、という社会の風潮から成ったものだろうし、「嫁」も言わずもがな。「細君」の「細」は「つまらないもの」という意味合いを含んでいて、ひいては自分の妻をへり下って話しているのだと知りました。これらは概ね夫が妻の話をする時に用いられる呼称で腹立たしいなと思いました。

———

ゲイである友人に自分がゲイであることで、人間関係（異性愛者との）中で1番傷つくことは何かと尋ねたことがあります。すると彼は「特にはないけど、強いていうなら『ゲイ』や『ホモ』という言葉が、『あいつ絶対ゲイやん。』『ホモドッキリ（ある人が自分の男性の友人2名が抱き合っているところを目撃し、その友人2名がゲイなのであると錯覚するもの。）やろうぜ。』とか蔑称として使われるときかな。自分が悪い人間かのように感じるし。』と答えました。このことで僕は言葉の由来がどうとかも差別であるが、実際の使われ方も差別をつくる一要因なのだということを発見しました。

【あべのコメント：言語学でいえば意味論と語用論のちがいです。】

———

夫婦の間で子供ができたことによって妻が夫から「ママ」と呼ばれるようになることが珍しくありません。そして「ママ」と呼ばれたくないと考えている女性が少なからずいるのも事実です。これは母親である以前に一人の女性として見て欲しいという気持ちと、そもそも夫の母親になったつもりはないので、甘えて欲しくないという気持ちがあるからだと思います。子供に弟や妹ができた際に「お兄ちゃん」や「お姉ちゃん」と呼ばれるようになることもあります。そこから「お兄ちゃんだからしっかりしなさい」という風に呼称によって行動を規定されることがあると思います。

———

フランス語で、「salope」「サロープ」という言葉があり、「汚い」という意味で、身分が低く、梅毒などの病気を持っている女性に対して罵る言葉とされているそうです。

【あべのコメント：『ハフポスト』「女性蔑視のフランス語を考える展覧会って…何それ？」という記事が参考になりました（https://www.huffingtonpost.jp/2017/10/05/salope-exhibition-france_a_23234535/）。】

———

…なんとなく英語のstay-at-home dad（主夫）ってしっくりこないです。わざわざ家にいることを強調しているような気がします。

【あべのコメント：「househusband」という語しか知りませんでした。いろいろバリエーション、ニュアンスがあるようですね。】

———

私のバイト先では本人のJAF会員証の提示で割り引きをすることができるのですが、時々お客さんが明らかに本人のものではない会員証を出すことがあります。バイトを始めたばかりのときは「だんな様／奥様のものですか？」と聞いていたのですが、その度に「別に夫婦と決まったわけでもないし、現代で『だんな様』『奥様』ってちょっとな…」と思っていました。とはいえ、他の呼び方が思いつかず、しばらくそのままだったのですが、ある日他のバイトの人が「おつれ様はいらっしゃいますか？」と質問していて、「これだ!!!」と思いました。それ以来「おつれ様」を使うようにしています。「主人」の話を聞いて、「おつれ様」という言葉を知ったときの感動を思い出しました。／個人的に性差別を感じるというか、腑に落ちないのは「女々しい」という言葉です。「女々しい」という言葉が全てネガティブな意味で、人を罵倒するのに使われるのも気にくわないのですが、「女々しい」の対義語が「雄々しい」でポジティブな意味をもつのがまた嫌だなと感じます。

———

結婚している男性が自分の奥さんに対し、「家内」という言い方がありますが、私は以前から気になっていました。奥さん、妻、つれ…どれも同じ既婚の女性を指す言葉ですが、「家内」だけはすぐに人に結びつけられないと思っています。私たち日本人は「家内」＝家の留守を守る人＝奥さんという図式が成り立っていますが、海外の日本語学習者「家内」と聞いて、何の知識もなしに奥さん・妻であることがわかるのでしょうか。海外のみならず、近年の日本でも既婚の女性が外に出て働く共働きの家庭も増えているので、奥さんが家にずっといるという家庭が少なくなりました。昔なら「家内」＝奥さんというのはすぐイメージがついたかと思いますが、現在だと分かりにくいのではないかと思いました。／最近の女子高生は1人称が「わい」になりつつあるというのをこの前見かけました。「わい」というのは掲示板の2chで使われていたいわゆるネットスラングであまりいいイメージを私はもっていません。でもネット上ではオタクの人たちや2chを使っていた人が「わい」を使いつづけたことで、由来を知らない今の女子高生が使っているみたいです。最近はネットで使っている言葉がそのまま日常生活の言葉に出てくるので、そのような言葉遣いはどうなんだろうなあ…とつい考えてしまいます。現実とネットは区別するという私の考えはもう古いのでしょうか。

【あべのコメント：パッとおもいつくだけで英語の「housewife」、朝鮮語の「집사람 チプサラム（家の人＝妻）」があげられるので、にたような表現をもつ言語はほかにもあるんだろうとは思います。話はズレますが、そもそも妻のほうが収入が多いとか、夫はほとんど働いていないという場合もこれまでも現実として多々あったんですよね。『自虐の詩（うた）』というマンガ・映画がえがいているような。狩猟採集社会についても、むかしは「狩猟」という面だけを強調し、女性たちは肉をまっていたかのように記述されていた時期がありました。栄養のほとんどは採集で／わたしの世代だと、「わい」といえば「わいは猿や。プロゴルファー猿や。」というアニメのセリフなんですよね。「わい」も、むかしからある一人称です。世代ごとに、関連づけるものや語感はことなるでしょう。】

———

「ボクっ子」の言葉を思いだしました。ボクを使う女性のことで、それに特別な名がついていることに意識がでてる気がします。…後略…

———

役割語は差別表現と密に関わっているように思いました。キャラクターをつけるために仕方のないことと割り切る人も大勢いるでしょうが、その背景にまで考えの及ぶ人はどれほどいるでしょうか。現在放送中のドラマ『俺の話は長い』のタイトルを見て、私は男性が主演であると思いました。このように受け取る人が、まだまだ日本語文化の中では多数派であると思います。「スネ夫」のママは、「～ざます。」と言う。私は子どもの頃から、古くささを感じていた。性差のある表現に古くささをおぼえるのは、「そのキャラクターに独自の表現（語尾）」として定着した証だと思います。性差から離れた、というか。

———

英語だと、‘’husband‘やwife’というように、夫と妻そのものを表す単語があるが、日本語の「主人」は元々の意味は「お仕えする主（あるじ）」であって、そこに日本の亭主関白の文化が合いまって、「主人」が夫を指す語として使われるようになったのだとすれば、講義で触れられた「パートナー」という言い方は、結婚の有無や男女問わないという観点からも日本社会のダイバーシティに対する視野の広がりを見ることができ、「言葉は社会の鏡」であるが、言葉が社会に先立つこともあるのかと思いました。ドイツ語には、女性名詞、男性名詞、中性名詞があるのに対して、フランス語には女性名詞と男性名詞という概念しかありません。

———

自分は以前ドイツ語を勉強していましたが、人の役職の単語を学習すると、例えば「freund（友人）」を基本形として覚えますが、この形は主に男の友人の時しか活用せず、女性である場合では「freundin（女の友人）」というように、後付けをする形で区別されています。他の名詞でもほとんどが男性の形が基本形のものとして覚えます。これはやはり男性の立場の方が優位であるのではないかと捉えることができてしまうと感じました。

———

フランス語を勉強しているが、職業名において性差別的である。…中略…職業名は基本的に男性名詞のため、ポリティカルコレクトネスの観点から見て不当だとして、職業名の語尾を変えることによって区別をつけるようにした。（ex. Professeur（教授）→professeure）

———

私は友達と話すときによく「口悪い」と言われる。たしかに、丁寧な話し方の女の子をみるとすごくきれいだと思うし印象も良いと思う。でも私からしたらそれはどうしても「作っている」感じがあり、違和感がある。ジェンダーマイノリティーの人にとってもそうだが、特に友達と話すときなど、制限がない場合は、「自分らしい」「自分の話したい」話し方をするのがなぜだめなのか、分からない。

———

当時『カルテット』大好きでハマっていて、母と面白いよねとよく話していました。その時に坂元裕二さんを知りました…中略…それ以前に見ていた『いつ恋』も坂元さんだったんだと思い、『anone』も坂元さん脚本と知り、見ていました。坂元さんの作品には、他の作品と一線を画すような印象的なセリフや表現が多いなとかんじます。…後略…

【あべのコメント：『最高の離婚』や『問題のあるレストラン』もぜひ。野木亜紀子（のぎ・あきこ）さん脚本の作品もおすすめです。】

———

レポートについて

2月2日までに提出。12月27日までに提出してもいい。教室で手わたしか、abeyasusi@gmail.comに添付。

テーマについての提案：社会のなかには、さまざまな規範がある。その社会規範が言語行動や言語状況にどのように影響をあたえているのか、そして、そのなかで、人はどのように規範をむきあっているのか。ことばをしばる社会規範について、具体的にとりあげ、批判的に検討する。

あるいは、災害や日常の場面で情報伝達は基本的人権にかかわる問題である。情報保障や言語権の視点から具体的な課題をひとつとりあげ論じる。

社会言語学に関連する研究雑誌を手にしてみて、どのような題がつけられているのかを参考にするとよい。教科書的な題のもの（概論的なもの）ではなく、自分なりの独自性をアピールする内容にすること。題もテーマも、他人がよんだときにおもしろいと思えるものにする必要がある。

ポイント：第1回のプリントをよみなおすこと。内容がイメージできるような具体的な題をつけ、レポートの冒頭で、問題意識をのべる（問いをたてる）。そして、その問いについてほりさげるために必要となる文献から状況や議論に言及し、最後に自分なりのまとめをのべる。参考文献についても、書誌情報をきちんと明記すること。レポートの基本をふまえていない形式のものは評価しない。なぜそのテーマが重要なのかを自分なりに説明し、適切な文献をふまえたレポートにすること。引用が主にならないように注意すること。あくまで自分で文章を構成し、のべていくなかで必要なところで文献を参照・引用するようにする。

【〜だろうか。この点について、◯◯はつぎのようにのべている。】
【◯◯によると、】

などのように明示すると、自他の文章の区別が明確になり、安心してよめるレポートになる。そこをあいまいにした文章はそもそもレポートではない。